

Title	Formations of Black Transnational Cultures : Claude McKay and Richard Wright as Diasporic Writers
Author(s)	古東, 佐知子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59633
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (古 東 佐 知 子)

論文題名

**Formations of Black Transnational Cultures:
Claude McKay and Richard Wright as Diasporic Writers**

(黒人たちのトランスナショナルな文化形成—ディアスポラ作家としてのクロード・マッケイとリチャード・ライト—)

論文内容の要旨

20世紀の二人のアメリカ黒人作家Claude McKay (1889-1948)とRichard Wright (1908-1960)のディアスポラ性に注目しながら、黒人文学に常につきまとう「本質主義批判」の問題を論じる。本質主義とは、文化に本質的で固定された「らしさ」を求める危うい態度の事であり、近代以降の黒人文学にはこの本質主義としての批判がつきまどってきた。例えば本質主義批判の根拠として、白人性を前提にした黒人性や、既存の黒人ステレオタイプを反転させたものを肯定的なものとして提示したところで、黒人の他者性を認めてしまうことになり、白人の優位性をかえって強めてしまうという事が指摘される。さらに、黒人のアイデンティティや本質主義の主張をもとにした公民権運動、アフリカでは旧植民地国の独立などを経ても、なお人種による不平等な関係や対立が残されているという状況もある。こういった批評や社会の状況を踏まえて、本研究は黒人文学・文化の他との接触・変容に注目し、純粋な「黒人性」の探究ではなく、横断性を認識することによって、新たな価値の可能性を提示する。

近年、黒人文学・文化研究においては、本質主義批判を背景として、黒人文化を特定の土地に限定された不変のものとして捉えるのではなく、外との接触を通して見直す試みが盛んにされてきた。例えばアメリカやカリブにおいて、ディアスポラである黒人たちがアフリカとの流動的なつながりを、自らが受け継いだ遺産の中でその痕跡を模索してみたり、近代以降のヨーロッパとの接触や他の場所の黒人たちとの交流に注目することなどによって、黒人文化を新たに捉えなおそうとしているのである。これは、純粋な自らの起源を求めてアフリカとの直線的なつながりを求めるものでも、異なる場所にいる黒人たちの共通の「黒人性」を安易に主張するものでもない。つまり、「黒人」の文化を、ローカルな場所に固定された、境界に囲まれた不変のものとして認識するのではなく、その流動的な性質に注目して、大陸を超えたより広い規模での黒人文化の性質や力関係に重点を置き、黒人文化を再評価する試みが実践されているのである。

境界線を越えたトランスナショナルな文化形成を実践した初期の作家として、論文の前半部では、Claude McKay をとりあげる。McKayは一般的に黒人作家としてアメリカ文学の枠組みの中で論じられることが多かったが、近年はネグリチュード運動への影響や、黒人文化のハイブリッド的側面を提示していたことなどから評価されている。彼はジャマイカの農家に生まれ、20世紀初めに合衆国に渡ってからはハーレム・ルネッサンスに関わり、その後は共産主義に傾倒したことにより革命直後のソ連を訪問し、フランスではネグリチュードの創始者と崇められ、晩年にはアフリカにも渡っている。McKayはまさにディアスポラに生きた作家・詩人でもある。本論では、このMcKayの作品を本質主義の問題や、ネグリチュード運動やその後のポストコロニアル研究への影響などから分析する。またディアスポラとして生きたMcKayが、様々な活動に関わりつつも、常に中心から距離を保ったアウトサイダーであった点にも注目し、彼が選択した位置である「周縁性」の可能性について論じる。そして、McKayの関わったハーレム・ルネッサンスがアフリカ系アメリカ人のモダニズムだと評されることを踏まえ、当時急増していたメトロポリタンへの移民の貢献や、「移動」の効果という観点から読み直す。

後半部は、McKay以後の作家であり、彼からも影響を受けたとされるRichard Wrightの作品について論じる。Wrightは初期、アメリカ内部の人種問題を描いていた作家であるが、フランスへの移住後、植民地主義などより広い視野から人種の問題を描くようになる。独立直前のガーナでルボを残し、また有色人種による戦後初の大規模会議・アジア・アフリカ会議に参加し、パンアフリカニズムや大西洋を越えて巡回する黒人文化・思想に対して、鋭い考察をのこしている。ここではMcKayとは異なる、Wrightによる本質主義の乗り越えの試みについて分析する。

またWrightは都市の空間がいかに人種の境界線によって分断され、その境界線がいかに階層的に強固に管理されているかも指摘している。こういった都市の周縁表象を、場所とアイデンティティーの結びつきから論じる。そして最後は、過去からの遺産や、培ってきた自らの文化を、いかに本質主義に陥らない形で表象するかという、現代の黒人作家達にとっても重要なテーマを、彼らの作品における実践とともに考察する。

Chapter 1 Claude McKay and the Critique of Black Essentialism

・ Claude McKayは1920年代にアメリカのハーレム・ルネッサンスに関わった後、1930年代にはフランスのネグリチュード運動に影響を与え、ネグリチュードのAimé Césaireからも「(McKayの作品)Banjoはネグロに尊厳を与えた最初の作品」だと評されている。しかし両運動とも、後の植民地独立運動への影響などからその先駆的な役割が認められていながらも、近年のポストコロニアル批評などからは、「黒人性」の主張が本質主義だという批判を受けている。本章ではClaude McKayとネグリチュード運動家Césaireの主張の比較を軸に、その本質主義批判の妥当性を検討する。

・ McKayとCésaireの両者は、『アフリカ回帰運動』を指導したMarcus Garvey (1887-1940)について言及している。このGarveyは、「黒人」人種の純粋性を強調し、「白人」人種と混ざり合うことを否定していたという点で、黒人側からの人種主義だともいえる。一方Césaireは、アフリカをエキゾチックに描写し、ヨーロッパ接触以前の性質をネグリチュードの中心として捉えたが、その知識はほとんどヨーロッパ経由で手に入れた「アフリカ」であった。この両者とはちがいが、McKayの描くものは、より柔軟で既存の「黒人性」の枠にはまるものではなかった。

・ McKayが小説の中で提示したものは、音楽や友情、恋愛や喧嘩を通してのより現実的な黒人少年達のフランスでの日々の生活であった。既存の表象の枠組みとは異なる、都市における雑種の／ハイブリッドの黒人労働者の生活を描写し、本質主義的な「黒人性」の主張を超える抵抗の可能性を示している。「黒人主義」や当時もてはやされていた「黒人の地位向上」ではなく、むしろ、黒人青年達の日々の生活の描写を通して、McKayが既存の価値の優位性に対抗していたことを提示する。

Chapter 2 Claude McKay as an Outsider

・ アメリカのハーレム・ルネッサンスの芸術家たちのなかで、Claude McKayはジャマイカ出身であるという点において特異である。彼は20代前半までをジャマイカで過ごし、渡米後もハーレム・ルネッサンスのブルジョア的雰囲気嫌い、その活動から一定の距離を保っていたとされる。

・ アメリカ史においても、19世紀末から20世紀前半は、カリブ移民の波が押し寄せた時期であったが、彼らの存在は近年の研究まであまり注目されることがなかった。ニューヨークにおいてカリブの知識人たちは、 Kommunismusの影響下、後のブラック・アトランティックの礎となる多様な急進派グループを形成したとされる。McKayもこの時代のKommunismusに深く関与することになるが、しかしその正式な黨員となることはなかった。ハーレム・ルネッサンス、Kommunismus、そしてフランスにおけるネグリチュードなど、さまざまな活動に関わりながらも、つねにその外縁にとどまることを選択したMcKayの「アウトサイダー」としての位置を読み解くことが、彼の文学の意味を探る上で不可欠と考える。

・ ディアスポラの作家であったMcKayは、つねに文化や国家の外縁に位置しており、何らかのイデオロギー的集団の中心に位置することはなかった。しかしMcKayのこの周辺性は、批評家のHomi K. Bhabhaの言葉を借りるなら、構築された均質性に裂け目が生まれ、萌芽的なものが現れる場所でもあった。つまり構築された同質的な物語が破られうる場所なのだ。中心から距離を持ったアウトサイダーとしての位置から、黒か白か、右派か左派か、アメリカかカリブかといった枠組みに回収し得ないものを模索したMcKayの文学は、本質主義を乗り越えようとする現代にも通じる価値があるものである。

Chapter 3 Claude McKay and Black Modernism

・ ここではMcKayの関わったハーレム・ルネッサンスとモダニズムの関係性を「移動」という観点から論じる。モダニズムは田舎や植民地の僻地など周縁からの人々の移動によって形成されたとRaymond Williamsはいう。そして地理的にもイデオロギー的にも境界線を越えてメトロポリスに集まった人々の、相反する思想や立場が一体的なの

運動として一括されることが問題だとされる。つまり、本来もっていた都市の雑種の性質も、モダニズムがある特定の期間の中に設定されその中に封じ込められてしまうと、そこにあった多様な流れが不可視化されてしまう事が問題なのである。

・ハーレム・ルネッサンスもアフリカ系アメリカ人のモダニズムだとされるが、その文学・芸術運動もグレート・マイグレーション（北部大移動）を経験した南部出身の黒人や、当時急増していたカリブからの移民の貢献が大きかった。そして、その中の多くの作家・芸術家が世界恐慌後の1930年代にニューヨークからパリへといわば2度の移動を経験している。反ブルジョワがやがて支配的なものに取り込まれてしまったヨーロッパにおけるモダニストたちと異なり、ハーレム・ルネッサンスの芸術家たちは規範的な文学の中に受け入れられることを切望したにもかかわらず、人種が要因になり、ニューヨークやパリの外縁に留まることを余儀なくされたという背景がある。

・ハーレム・ルネッサンスは「ジャズの時代」とも呼ばれ、ニューヨークでファッショナブルにもてはやされたが、McKayも含め彼らの作品の形式は、JoyceやEliotのような「モダン」には響かない。しかしHouston A. Baker, Jr. は、アフリカ系アメリカ人のモダニティやハーレム・ルネッサンスを、アングロ系アメリカやイギリスもしくはアイルランドのモダニズム概念によって評価し、それがアメリカ黒人の見習うべき成功例と考えることは間違いだと指摘する。アフリカ系アメリカ人の文学を別のカテゴリーとして外側に追いやるのではなく、関係性の中で論じることが重要である。こういった点を踏まえ、この章では複数化されたモダニズムの例の中でMcKayの移動の効果について論じる。

Chapter 4 Richard Wright and his Border Crossing: Over “Blackness” against “Whiteness”

・本章では、Wrightの後期の二作品*Black Power*と*The Outsider* (1953)を取り上げ、ガーナ独立運動やアジア・アフリカ会議とライトのかかわり、 Kommunismusと人種問題のねじれた関係などに光をあて、この作家が大西洋を横断しながら追及した「黒」対「白」の乗り越えについて論じる。これらの作品中には、アメリカの黒人と、植民地主義から独立を得ようとするアフリカの人たちとの微妙な関係、アメリカの黒人問題を政治的に利用して力を得ようとする白人Kommunismus幹部と、それに縋り付く黒人党员など、複雑な関係性が提示されている。初期の作品に比べると、焦点のあたるものが少ない後期の作品を詳細に分析することによって、黒人文化の存在を、国家の枠組みを超えて捉えようとしたライトの可能性を新たに示す。

Chapter 5 Wright’s Representations of Spatial Boundaries

・アメリカの都市には、人種・民族を基にした境界線が未だに根強く残っている。こういった境界線は、現代のグローバル化における人々の移動や、アイデンティティーの主張の中で、薄まるどころか皮肉にもより強固なものになっていると言われる。作家Richard Wrightの都市の人種による境界線の描写を例に、地理的な境界がいかに意識的な境界線としてとりこまれ、その境界線が階層的に管理されているかを論じる。

・さらにRichard Wrightの描く都市のゲットーについて分析する。文学や映画の中で、ゲットーという場所は退廃的でネガティブなものとして一面的に描かれることが多い。さらに、歴史的に「黒人」と「ゲットー」は無条件に結び付けられ、結果的に彼らのステレオタイプがより強められてきたという背景がある。本章ではそういった傾向に反発し、新たな表象の可能性を模索したWrightの作品や黒人映画に着目し、彼らのゲットー表象における有用性を分析する。

Conclusion

・Claude McKayやRichard Wright以後のディアスポラの現代黒人作家にとって、自らの起源であるアフリカや奴隷としての過去というのは、今でも重要なテーマである。そもそも、自分たちの持っている起源や歴史を考えることが即「本質主義」になるわけではない。歴史の複雑性を維持し、単純な声に絡めとられない表象の模索こそが重要になってくる。以上を踏まえ、McKayやWrightのディアスポラ作家としての先駆的な貢献を評価する。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (古 東 佐 知 子)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	教授	木村 茂雄
	副 査	教授	ヨコタ ジェリー
	副 査	准教授	山田 雄三

論文審査の結果の要旨

黒人文学に往々にしてみられる「白人性」に対する「黒人性」の自己主張は、白人による黒人のステレオタイプを反転させたものにすぎず、黒人みずからが自己のアイデンティティを固定化する「本質主義」に陥っているという批判がしばしばなされてきた。本論文は、20世紀のアメリカ黒人作家クロード・マッケイとリチャード・ライトの作品群における「ディアスポラ性」や「超域性」(transnationality)に着目し、そこで行われている新しい文化的価値や「ポストコロニアル性」の形成について論じた英語論文である。論文は第1部と第2部に分かれ、第1部(第1章、第2章、第3章)ではクロード・マッケイを、第2部(第4章、第5章)ではリチャード・ライトを扱っている。

第1章では、1920年代のアメリカのハーレム・ルネッサンスに関与し、さらに1930年代のフランスのネグリチュード運動に大きな影響を与えたマッケイと黒人本質主義との関係について論じる。マーカス・ガーヴィーの「アフリカ回帰運動」に対するマッケイの反応とネグリチュード運動のエメ・セゼールが唱えた黒人性の比較分析を軸に、マッケイの『バンジョー』における若い黒人労働者たちのハイブリッドな生活の描写には、「黒人主義」を乗り越えた柔軟な価値観が表現されていると主張する。

第2章は、マッケイとハーレム・ルネッサンス、ネグリチュード運動、コミュニズムとの関係に焦点を絞り、彼がこれらの運動に関わりながらも、その中心からはつねに一定の距離を置いていたことを指摘する。そして、このようなマッケイの周縁的な立ち位置を、ホーミ・バーバのポストコロニアル理論を援用し、均質性の裂け目から萌芽的なものが生み出される場として再評価している。

第3章では、レイモンド・ウィリアムズのモダニズム論を参照しつつ、モダニズム運動は、周縁の人びとの中心への移動と密接に関係して推進されたものであると主張する。そして、ジャマイカからアメリカへ、そしてフランスへ移動したマッケイの文学を、このようなモダニズムのなかに位置づけて読み直す可能性について論じる。

第4章は、リチャード・ライトの『ブラック・パワー』と『アウトサイダー』を取り上げる。ガーナ独立運動やアジア・アフリカ会議(バンドン会議)とライトとの関係、人種問題とコミュニズムとのねじれた関係などに光をあて、ライトが大西洋を横断しながら追求した「白」と「黒」の対立の乗り越えについて論じる。

第5章では、ライトの都市表象において、人種の境界線が地理的な境界線としてどのように意識化され、階層的に管理されているかを論じる。また、ネガティブな空間として一面的に捉えられることの多い「ゲッター」が、ライトの作品において、さらには1970年代の黒人映画において、ステレオタイプ化を超えた新しい表象を獲得するにいたっていると主張する。

以上のように本論文は、2人の黒人作家をおもな対象に、そのディアスポラ性、超域性、ハイブリッド性などの視点から首尾一貫した議論を展開している。その議論は、グローバル化時代における文化形成の問題にまで射程の及ぶ野心的なものと評価することができる。とくに、日本では評価が進んでいないマッケイの作品が、20世紀初頭においてすでに具現していたポストコロニアル性を詳細に分析したことは、学術的に貴重な成果といえる。歴史的な分析がやや弱弱点、マッケイにくらべライトの分析が厚みに欠ける点なども指摘し得るが、それは本論文の価値を根本的に損なうものではない。よって本論文は、博士(言語文化学)の学位論文として十分に価値あるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを行なった結果、本論文には問題がないことを確認した。